

# 卒園式または自分を解き放つこと

間 藤 侑

三月、附属幼稚園の卒園式前日でした。卒園児の座るステージの足元には、色とりどりの花がきれいに植えられた真っ白なプランターが並んでいます。そこに少々遠慮気味の卒園児の担任の声。

「子どもたちの育てたサクラソウの鉢をどこかに並べたいのですがどうでしょうか」

見ると、見事な花の盛りもあれば、咲きかけやまだつぼみをつけたばかりのものなどと、ばらばらです。鉢にも自分で名前を書いてあるのであまりきれいではありません。担任の気持ちもわかるが少しちゅうちょするところもある、そんな気分でした。

しかし、折角の担任の思いを大事にしてあげ

たいと、あそこならどうか、ここなら邪魔にならないなどと皆で考え合つてゐるうちに、ふつと何か大切なものを忘れていてることに気付いたのです。

私たちの園では、臨床的感覺を保育者の基本的姿勢の核において考え方としています。卒園式のような行事でも、ふだんの保育と断絶したものではないように工夫してきました。その文脈で考えれば、子どもたちの育てた花を飾ることがいちばん自然だったはずなのに、

整った会場作りを優先させようとしたあの一瞬のちゅうちょは、いつたまに何だったのかと、反省を込めて振り返させられました。

あるこだわりから自分を解き放つてみると、子どもたちの花が、実はとても大きな意味をもつことに気付きました。同じに播いた種なのに成長の仕方は、いぶん違う、花の色の種類も多

様です。きっと大事にして毎日観察したり、こまめに水をやつていた子もいる一方で、ほとんど放つておいたものもいたでしょう。もっとも、そのどちらがよく育つかは簡単に評価できません。しかし間違なく言えることは、今まで咲いていない鉢でも、やがて必ずきれいな花を開き、人の心をやさしくしてくれる時が来ることです。これはまさに、明日幼稚園を去つていく子どもたちのすがたそのもののように思われました。

一人ひとりのサインのある花の鉢が最前列に並んで、プランターの真っ白い面は隠れ、でこぼこの高さの花が主役になりました。でもそれは、きれいに植え込まれた先生たちのプランターの花をバックにしていたからこそ、そこに置かれて絵になつたのです。その不揃いな花ほど私たちの卒園式にふさわしく、また象徴的な

ものはない感じたのでした。

ところで、保育の場は本質的に臨床的であるとも言われますが、臨床的な感覚で日常の保育に関わっていくとは、具体的にはどうしたことでしょうか。簡単に言えば、それは、評価を急がずフォローし続けること、常に関係や文脈の中でのものを考えようとするなどかな、と私は思います。そしてそのためには、想像力と好奇心（問題意識）に支えられた柔軟で開かれた心が求められるでしょう。

また臨床的感覚とは、ある意味で思想と言つてよいかかもしれません。それは本来、「○○は△△でなければならない」というような教条主

義から最も遠い所にあるからです。先の卒園式のエピソードも、最初は教条主義の奴隸になりかけていたのでした。

保育の場は、一見小学校教育などよりずっと自由度が高いと言われます。しかし本当にそうでしょうか。「あるべき姿」「ふさわしい環境」「援助の在り方」などという言葉にとらわれて、肝腎の子どもたちの姿が消えてはいないでしょうか。臨床的感覚とは、こうした言葉から自分を解放し、何よりも日常の実践から出発することにあるのです。そのためには、より高度な自己研鑽が必要かもしれません。

（新潟大学）